

門 (dvāra)

柏 原 信 行

1. まず、梵語での dvāra の意味と、パーリ經典に見られる用例を挙げる。

① 入口・出口としての門。これは Vinaya i. 15 や Dīgha-nikāya (D. ii. 83, 171) 中に、城の門 (nagara-dvāra) などとして用いられている。

② 人体の九つの孔。kha (孔) と同義で、veda や Upaniṣad の中に見られる。Chandogya-Upaniṣad では、呼吸に関与する心臓の門とされている。なお、Aitareya-Upaniṣad 1. 1~2, 11~12 に言われる所の、アートマンが生類に入る時の門は、vidṛti (頭骸骨の縫合) である。パーリ經典では、Saṃyutta-nikāya (S. i. 16, 63) に、汚物が満ち、貧欲に束縛され、不浄である九つの門 (nava-dvāra) という記述が見られる。Aṅgutaṛa-nikāya (A. iv. 387) では、九つの傷口 (nava vaṇa-mukha) としてあげられる。これは、切られたことなどによるのではなく自然にできた口 (abhedana mukha) であつて、そこからは不浄物がしたり、悪臭が漏れ、好ましからざるものが漏れるだけであり、身の同義語である、とされている。仏教では、それらの九つの孔のうち、特に感覚器官に存在する眼・耳・鼻・舌・身根に意根を加えた六根を門と呼ぶ。S. iv. 194 では、その六つの門を城の門にたとえ、城の門の門番を念 (sati) にたとえて説明する。城に門番があつたことは D. iii. 148 にも見られ、A. iv. 107f でも、念のたとえとして門番があげられている。又、Milindapañhā p. 62 では、識を城を守る者 (nagara-guttika) にたとえ、各方角を見ることを五根によつて五境を捉えることのたとえとする。S. iv. 119 (雜阿含九, 大 2-64a) では、守られた門 (gutta-dvāra) について、眼等学によつて色等を見るなどのことをしても、煩惱を起こさないことと述べられている。この経は、阿毘達磨順正理論卷七 (大 29-366a~) の根見説・識見説のテーマでの議論のところで引用されている。

③ dvāra は、「~の入口」という意味から、方法・手段という意味にも用いられる。特に Instrumental の形は「~によつて」という意味で用いられる。現在のヒンディー語でも、dvār は所謂門という意味を表わすが、dvārā は「~によつて」という意味で用いられている。

dvāra の語源については、√dvṛ (妨げる) を語根とすると考えられている。

パーリの注釈書の中での etimology では、Abhidhammattha-Saṅgaha (Abhidh-s) の註釈書 Abhidhammattha-vibhāvanī (Abhidh-s-ṭi) p. 73 に、非色法が起こる口 (mukha) であるとか、Abhidh-s の近世の註釈書 Paramatthadīpanī (Pa) p. 107 に、中と外にいる二人 (dve) が行く (aranti) という解釈をし、外の者が入るというので入り口、或いは、中の者が外に出るというので出口という意味になるとか、Abhidhānappadīpikāsūci p. 271 には、二つの (dve) 扉がそこに於いて動く (caranti) とか、悪人 (dujjana) の侵入を防ぐ (vārayanti) 等という解釈がされ、その他では、六境が入ってくる入り口として解釈される (Pd. p. 107; Abhidh poraṇaṭṭikā p. 309; Saṅkhepaṭṭikā p. p. 24; Paramatthamañjūsā p. 974)。

俱舍論卷一 (大 29-4b~; AK pp. 13~; AKV. pp. 42~) や順正理論卷三 (大 29-343b~) では、処 (āyatana) についての説明の中で、処とは心・心所が生じてくる門 (āya-dvāra) の意味であるとし、門を心・心所の生ずるところと解釈している。

パーリ・アビダルマでは、六内処、六根を門として扱うが、これは、人体の九つの孔 (dvāra) のうちの感覚器官の中枢であるとされた根 (indriya) は、所縁の入り口としての門 (drāra) と捉えられ、さらには、「それによつて」心生起があるという縁生の思想を含めて考えられたと言えよう。

2. 門は、このように六内処即ち六根を指すのであるが、その六根の色界に於いての存在・非存在について、各部派によつて解釈が異なっている。

俱舍論卷二 (大 29-7b~; AK. p. 20~; AKV. p. 60~) や順正理論卷四 (大 29-348b~) の界繫分別では、色界には段食 (普通食物) が無いから、香・味の二境が無く、境がないから鼻・舌の二識も無いと説く。しかし、鼻・舌識の所依である鼻・舌の二根については、はなが無くなれば容貌が悪くなり、舌が無ければ口がきけない、として、鼻・舌二根の存在を認めている。身根・身識についても、衣服の感触や、入定中の身柔軟性の感覚を認識するためとして、その存在を認めている。有部では、議論を好むためか、実践、あるいは自己の分析・認識の上では、あまり関係も無いような事柄であるこの点についても、男根や流産する胎児などを例にあげて述べているのである。

唯識宗でも、雜集論卷三 (大 31-708a~; Abhidharmasamuccaya, Gokhale's ed. p. 22; Abhidharmasamuccaya-bhāṣya p. 26) の界繫分別で、鼻識・舌識・香・味の四界と、香・味の二処は欲界のみにあるとされ、有部と同じ立場を取る。

しかし、所属部派不明とされている舍利弗阿毘曇論卷十二では、色界天上の名色について述べるところで、色界では眼・耳・身・意根を得するとしており、色

界での鼻根・舌根を認めていない。これは、有部のようには容貌や議論などを重視していなかったことを物語っている。

これに比べると、南伝上座部では、Abhidh-s p. 30 の色の解説中に、色界では鼻・舌・身は得られないとし、また Nāmarūpa-pariccheda v. 221 でも、心作用論の中で、鼻等の三門は色界には無い、とあるように、鼻根・舌根のみならず、身根も色界には存在しないとする。

Visuddhi-magga (vism. p. 445) の業の解説の中には、眼・耳は、自己の依処に附着せずに依止する色・声境のみを認識する因であるというので未到の境を把握し、鼻・舌・身は、依処によつて、または自ら自己の依処に附着する境のみを認識する因であるというので、已到の境を把握する、と説かれるが、上記の点には、このことも何らかの形で関与すると考えられる。

しかし、色界に鼻・舌・身根が存在しないことについての具体的な解釈は、他には見られず、B. Revatadhamma が言うように (Abhidharmaprakāśinī p. 717)、色界においては、眼根は仏を見るためであり耳根は仏法を聞くためであると解釈するのが妥当であろう。

3. Visum. p. 451 の二十八色の説明の中に、心基は基 (vatthu) であつて門 (dvāra) ではなく、身語の二表は門であつて基ではなく、浄色は門であり基であり、その他は基でもなく、門でもないと言われ、また、Abhidh-s. p. 28 には、浄と表の七種は門としての色であると言われるように、パーリ・アビダンマに於いては、六内処のみならず、身語の二表も門であるとされる。

業論については諸先学の著作 (『仏教心理学の研究』『仏教教理の研究』『業の研究』) に詳述されている。パーリ・アビダンマ、特に門としての二表について詳述する Atthasālinī に関しても、それらの中に詳しく取りあげられている。

ここでは、南伝上座部の二表論について若干附加する。

表 (viññatti) については、Atthasālinī pp. 82～の他、visum. p. 448 や Abhidh-s. pp. 27～にも述べられ、Kathā-vatthu p. 440, Milinda-paṇhā p. 244, Vibhaṅga p. 13 等にも見られる。これらとは別に、Vinaya v. 125 での、妄語の説明では、騙そうとする者の語・言葉・話・説等と共に、表 (viññatti) が語業の同義語として使用され、また、iv-2 には男女根を転ずる場合に、前の根を捨てて後の根を持てば、表は無効となり仮名は破壊されるとして、行為とは関係の無い外見としての意味で用いられる。これらは、いずれも未だ表の概念が確立されていなかったことを物語っている。

後の Abhidh-s p. 23 では、身表という身門、語表という語門、という表現がされている。触境の入り口である身門と身業の出口である身表とは全く別のものであり、二十八色の中でも身と表とは別立するのに、混同しているのは有部などのようには表の説が確立していなかったためであろう。

パーリ・アビダンマに於て、身語の二表も門であるとされる点について、Pd. p. 250 は、路心 (vithi-citta) や殺生等の業が起る門 (pavatti-mukha) であるからであるとする。また、五種の浄色は生起の門 (upapatti-dvāra) であり、二種の表は業の門 (kamma-dvāra) であるとしている。

有部の説では、十二処は心・心所を生ずる門であるとされていた。パーリ・アビダンマでは、業は全て心・心所として解釈され、業は心そのものに他ならないとされている。それ故、有部でいう「心・心所を生ずる門」という解説の仕方は、パーリ・アビダンマは、そのまま業を生み出す身語二表にもあてはまるのである。

パーリ・アビダンマでは、縁生の観点を強く残し、そのために、十二処、十八界、二十二根などのうちの、六内処、六根を特に門として扱い、更に業思想に関しても、身語の二表をも門として扱った。そして、二十八色の中の浄色と表とを共に門として挙げたのである。

4. 業を全て心・心所として解釈し、業は心そのものに他ならないというのがパーリ・アビダンマの説であるが、パーリ・アビダンマで挙げる八十九心（詳細には百二十一心）のうちには、門を離れたもの (dvāra-mutta) とされる心がある。

結生・有分・死の作用をなす心がそれである。Abhidh-s-ṭ p. 74 では、それらの心が門を離れていることの理由として、それらはどの門にも生起せず、それ自身が門であり、どんな新しい外からの境も取らないという三点をあげている。

結生心・有分心・死心は同一の心であり、結生から死までの間は有分心と呼ばれる。有分心は、所謂無意識の状態の心や潜在意識を指すのではなく、熟睡や悶絶の時や植物人間の状態の時の心であり、ただ存在の要素となるだけの心である。

南伝上座部では、六根と二表を門とすることによつて、人間の認識も行為も共に全て縁生の思想に基づいた解釈を加えたのであるが、この有分心に関しては門の概念を加えることができなかった。また南伝上座部の心作用論の体系においては、無意識に身体を動かしたり意味のある言葉を話したりした場合の心理作用に相当するものが見出さ得れない。これも、心作用論中の有分心の解釈上の欠陥と言えよう。(本稿は昭和55年度文部省科学研究費一般研究Bによる研究成果の一部である)

(大谷大学特別研究員)